

# 豊かなスポーツライフの実現をめざす授業の実践

～バスケットボールをしよう～

福永哲也\*・神代博晋\*・毎床英樹\*・坂下玲子\*\*・大石康晴\*\*

Practice of lesson to realize rich sports life

～Let's play basketball～

Tetsuya FUKUNAGA, Hirokuni KUMASHIRO, Hideki MAITOKO, Reiko SAKASHITA and Yasuharu OISHI

## 1. はじめに

2017年4月から2018年3月までの1年間、熊本大学教育学部附属特別支援学校教員と熊本大学教育学部教員による各教科等における授業改善に関する共同研究を行った。

本稿では、豊かなスポーツライフの実現をめざして高等部で行った保健体育科バスケットボールの実践内容、成果と課題について報告する。

### 1) 教科選定の理由

熊本大学教育学部附属特別支援学校高等部では、卒業して3年、6年、10年後に「働く」「家庭」「余暇」の3つの生活について面談を実施し、生徒のフォローアップのための「フォローアップミーティング」を行っている。その際のアンケートでは、働く生活に関しては伸びがみられる反面、家事、外出や趣味等の家庭生活と余暇生活の項目に落ち込みがみられることが明らかになった(図1)。

その結果を受けて、今年度は保健体育、音楽、家庭の3つの教科を研究対象として選定した。

### 2) 次期学習指導要領における保健体育科授業の在り方について

#### ①これまでの保健体育科授業の成果と課題

体育科、保健体育科では、現行の学習指導要領において、運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと、体力の低下傾向に歯止めがかかったこと、「する、みる、支える」のスポーツとの多様なかわりの必要性や公正、責任、健康・安全等態度の内容が身についたことなどの成果が挙げられた。

一方で、習得した知識や技能を活用して課題解決すること、学習したことを相手にわかりやすく伝えること等に課題があること、運動する子供とそうで

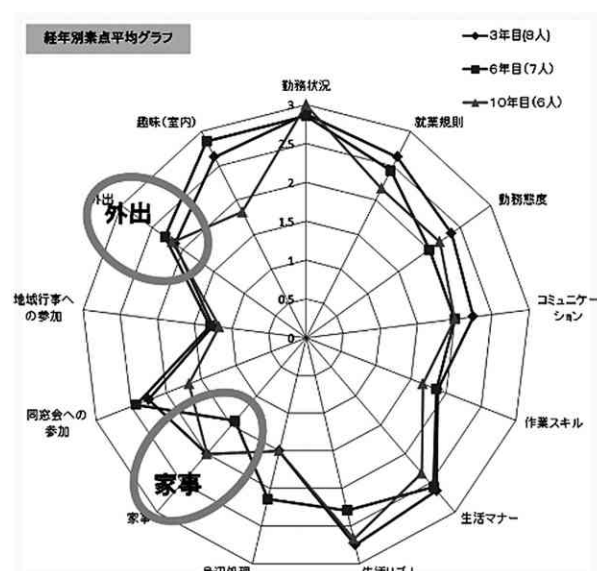


図1 フォローアップミーティングによるアンケート結果

ない子供の二極化傾向が見られることなどの課題に対して、更なる充実が求められるところである。今回の学習指導要領の改訂においては、心と体を一体として捉え、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することを重視する観点から、これらの課題に適切に対応できるよう改善を図っていくことが必要である(文部科学省, 2016)。

#### ②有成を目指す資質・能力の整理

育成を目指す資質・能力については、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の三つの柱に沿って整理が行われている。体育科、保健体育科においては、体育・保健の見方・考え方を働かせて課題を発見し、合理的・計画的な解決に向けた主体的・協働的な学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯に渡って心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を以下のように育成することを目指すことが求められている(文部科学省, 2016)。

\* 熊本大学教育学部附属特別支援学校

\*\* 熊本大学大学院教育学研究科

表1 育成を目指す資質・能力（抜粋）

○知識・技能 ・各種の運動の特性や魅力に応じた運動についての理解及び社会生活における健康についての理解を図るとともに、目的に応じた技能を身に付けるようにする。
○思考力・判断力・表現力等 ・運動や健康についての自他や社会の課題を発見し、合理的・計画的な解決に向けて思考・判断し、目的や状況に応じて他者に伝える力を養う。
○学びに向かう力・人間性等 ・生涯にわたって運動への多様な関わり方に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を養う。

## ③体育の見方・考え方

体育科、保健体育科では生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、以下の通り、示された（文部科学省，2016）。

「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること。

体育における学びの過程においては、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、運動に対する興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、「する、みる、支える」に「知る」を加え、三つの資質・能力をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図ること、また、粘り強く意欲的に課題の解決に取り組むとともに、自らの学習活動を振り返りつつ、仲間と共に課題を解決し、次の学びにつなげる主体的・協働的な学習過程を工夫し、充実を図ることが求められる（文部科学省，2016）。

## 3) 本校体育科、保健体育科における小中高の一貫性

本校では、平成29年度に小学部、中学部も体育科、保健体育科の授業改善について研究を行った。そこで、小中高の一貫性を持たせるために本校における保健体育科の重点項目を表2のとおり整理した。

表2 小中高の一貫性をイメージした保健体育科の重点項目

高等部	○自分の好きな運動を選んで実践できる ○様々な種目への取組（選ぶ） ○チームで作戦会議 ○仲間との協力、共感 ○体力の向上（筋力）	生活に必要な健康・安全に関する事柄を理解し、将来の生活を豊かにする態度の育成 【保健】
中学部	○運動の経験を広げる ○ルールのある運動 ○自分の身体・動きへの気づき ○相手を意識した取組 ○体力の向上（持久力）	思春期における健全な心身の育成 【保健】
小学部	○運動の楽しさ、喜びを感じ「好き」になる ○動きの基礎、基本（走る、跳ぶ、投げる、物の操作） ○友だちと一緒に ○体力の向上（調整力）	体の成長や健康に必要な事柄をしようとする態度の育成 【生活科・健康管理】

このように、小中高の一貫性を意識し、教育内容を充実、改善していくことで、豊かなスポーツライフの実現を目指す授業を行うようにした。また、これらの重点項目を「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの学びの過程を相互に関連させ、授業における学習の充実を意識した。

## 2. 実践経過の概要

日々の授業を充実させていくことで将来の豊かなスポーツライフが実現できると考え取り組んだ。本稿ではその中の一つ高等部のバスケットボールの実践について報告する。

## 1) 本研究のイメージ

将来の余暇のスポーツライフの充実を図るためには、生徒が「楽しい」「観てみたい」「実際にやってみたい」という気持ちを育むことが大切であると考ええる。このような気持ちを育むためには、「楽しい」「やってみたい」と感じられる授業の展開が必要である。具体的には、たくさんの人と一緒に活動すること、自分たちの動きを客観的に見ること、互いに支え合う経験、運動課題や解決方法について知ることについて支援を行う。生徒が主体的に活動できる環境を提供することで、「楽しい」「やってみたい」

という気持ちを育むことができると考える。

## 2) 年間計画について

年間指導計画において、今年度は球技を中心とした計画を立てた。4月から5月にかけて運動に関する実態調査とこれからの運動に備える意味からも体ほぐし運動を中心に計画した。

6月から夏休みを挟んで9月までの時期は、気温が高いこともあり水泳を中心に計画した。

9月から11月の時期には、バスケットボールを計画したが、途中で学園祭の時期が入り、保健体育の時間を確保できない時期もあるため、2ヶ月を越える長い期間を計画した。

12月には、バスケットボールで学習したボール操作を生かし、ハンドボールを計画した。

1月からは、バスケットボールやハンドボールで学習したスペースを使った動きを生かすことができるようにサッカーを計画した。

表3 平成29年度体育科の年間計画

期間	種目
4月～5月	体力テスト、体ほぐし運動
6月～9月	水泳
9月～11月	バスケットボール
12月	ハンドボール
1月～2月	サッカー

## 3) 週計画について

週計画では、朝の時間（火曜～木曜日）とは別に月曜に1コマを設定し、ゲームを中心に活動できるようにした。

表4 平成29年度高等部週時程表

	月	火	水	木	金
8:30	朝のクラスタイム(日常生活の指導)【3】				
9:00	高等部集会 (日生)【0.4】	保健体育【3】	職業/生活単元学習/ 総合的な学習の時間【7.2】	職業/生単/ 総学【1】	職業/家庭 【2.4】
9:20	HR/全校朝会 (特活)【0.6】				
9:50	音楽/美術/保健 体育【2.4】	給食・昼休み	学部清掃(日生)【2.4】	国語/数学【1】	国語/数学【1】
11:00					
11:50					
13:10	学部清掃 (日生)【0.6】	ステップアップ タイム (コミ)【1】	国語/数学【1】	職業/生単/ 総学【1】	国語/数学【1】
13:30	クラスタイム (日生)【0.6】				
14:10					
15:00					

## 4) 生徒の実態

6月に生徒に保健体育科授業に関するアンケート調査を行った。「体育が好きか」という質問には、好きと答えた生徒は約半数、苦手意識のある生徒も多い状況であった。

そこで、バスケットボールの活動を通して、チームでの話し合い活動や練習を行いながら、話し合い活動で挙げた課題点を、ゲームで実践・解決することで、練習したことができた喜びを味わうとともに、バスケットボールのゲームに積極的に取り組み、楽しむ力を育むことを狙って授業実践に取り組むこととした。

## 5) 共同研究者からの助言

授業観察を通して共同研究者から、授業改善のポイントとして以下のような点が示された。

表5 共同研究者からの助言

話し合い活動について	話し合いの中で、生徒主体は分かるが、練習内容や具体的な動きなど教師からも意見を言うことが必要。
	良いことを発言した時に、教師がまとめることが必要。
ゲームや練習の実践活動について	ボールに触れる回数を増やす支援が必要。
	ゲームを成立させるために、教師のサポートが必要。
	練習の仕方を自ら選んだり、課題点のポイントを明確に把握したりすることができるよう支援する。
	一人ではゲームに参加することが難しい生徒には、ゲームを成立させるための支援が必要。
	5対5はスペースに対して多いことから、まずは3対3くらいで、パスを回す意識から指導することが必要。スペースを使うという練習でも動きながらパスをするなど工夫して取り組んだ方がよい。

## 6) 授業における工夫点

授業における工夫点は以下の4点である。

### ① チーム編成とチームの固定化

リングにシュートが届く生徒と届かない生徒で大きく2グループに分け、チーム編成を行った。さらに、グループの人数は5人程度とし、運動量が確保できるようにした。

チームは、単元の間は固定して行うようにした。チームで話し合い活動を行う中で、一人一人のスキルや役割が明らかになり、お互いのスキルを考慮した発言やアドバイスを行うこともできるようになってきた。

### ② タブレットの活用

ゲームの中での動きをより客観的に把握できるよ

うにタブレットを活用した。タブレットを活用したことで、自分の動きやチームの動きを客観的に見ることができ、話し合い活動での手がかかりとなった。課題を視覚的に捉えることで話し合い活動が活発になり、ゲームの円滑な進行へと繋がった（図2）。



図2 話し合い活動におけるタブレットの活用

### ③ 視覚的な支援

授業を進めていく中で、なかなかシュートが入らないという意見が多く聞かれるようになった。

そこで、シュート練習の時間を確保したが、十分な時間とは言えず練習の質を高めたいとゴールのサポートエリア枠を意識することができ支援を考え、棒で視覚的に狙う場所を示すようにした。言葉だけの支援ではなく、部位を正確に視覚的に伝えたことで生徒も狙う場所がはっきりとわかり練習時のシュート成功率を上げることができた（図3）。



図3 ボールを投げる位置を示す支援

### ④ 授業の組み立て方

授業では、ゲーム・振り返り・課題別練習を繰り返すようにした（図4）。

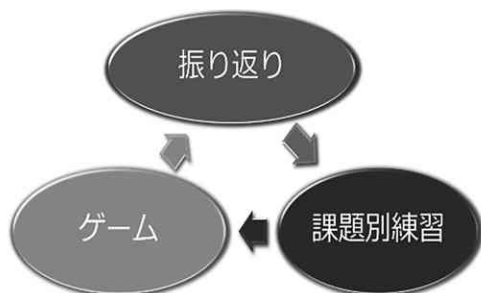


図4 授業内容の相関図

ゲームを行った後にタブレットを見ながらチームの課題点を把握し、チームの課題を解決できるように練習内容を考えてチームごとに練習し、ゲームで実際にやってみて課題が解決できたかを確認していった。

単元期間中、同じサイクルで授業を行うことで、生徒も見通しを持って活動することができ、1コマの中での活動も充実させることができたが、単元期間中も、継続して課題意識やチームを意識した活動を行うことができた。

## 3. 成果と課題

### ① タブレットの活用による客観的な課題の把握

タブレットを導入する前には、生徒たちにはマイナスの発言が多く、自分のことの振り返りができていない発言が多くみられた。

- ・誰かが誰かについた方がいいかな。でもなー。
- ・みんな集まりすぎじゃない？
- ・Nくんと僕はボールを持っている時間が多い
- ・みんな切り換えが遅い
- ・もっと冷静にしないと
- ・ゴールに近づきすぎないようにしよう
- ・後ろも見た方がいい

しかし、タブレットを導入した5回目の授業では、生徒たちから良い面に関する発言や、専門的な言葉も増え、具体的な作戦が出て来るようになった。以下に主な生徒の発言を示す。

- ・今日はいつもよりスペースがあった気がする
- ・シュートが入らないならパスしよう。ゴール近くは入らないよ。（ゴールの真下だと角度がないから）
- ・ディフェンスはとても良くなっているから、あとはシュートだね。
- ・黄色チームはTくんとKくんが上手だから、二人にマークした方がいい。

### ② 主体的なゲームへの参加

話し合いをする中で、生徒たちから「もっと声を出そう」という発言が多くみられ、ゲーム中に意識して名前を呼んだり指示したりすることができるようになってきた。

お互いに声を掛け合って、チームの勝利という目標に向かってまとまっていくことで、チーム全体のまとまりを感じることができた。

また、お互いに声を掛け合うことで、自然とコミュニケーションを深めることができてきた。

そのことで、ゲームの話し合い活動もさらに活気づき、「もっとシュートをしよう」から「パスを回してから（フリーな状態で）シュートをしよう」などと内容も深い話し合いをすることができるようになった。

### ③ 「楽しい、やってみたい」と感じる愛好的態度の変容

本単元最後にも生徒にアンケートを実施した。結



果、体育を「好き」と答えた生徒が約2倍に増え、「嫌い」という生徒がかなり減少した（図5）。

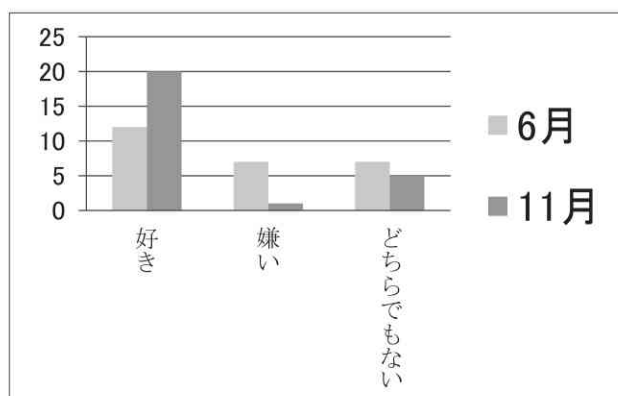


図5 体育について

また、バスケットボールに関するアンケートでも「好き」と答えた生徒が増え、「嫌い」と答えた生徒は見られなかった（図6）。

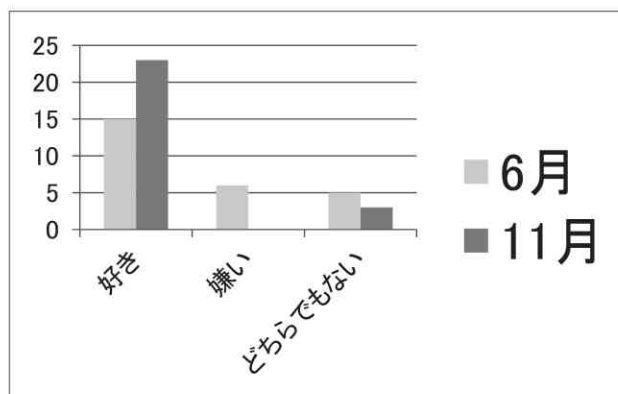


図6 バスケットボールについて

生徒の感想には、自分ができるようになったこと、バスケットボールを通して、運動に関心を持って取り組むことができるようになったことや運動をすることによって自分自身に自信を持つことができるようになったことがうかがえる記入が多く見られた。

また、専門的な言葉が使われるようになり、バスケットボールへの関心が高まったことがうかがえる。

以下は、この単元で生徒ができた実感したことである。

- ・味方にパスができた
- ・相手の様子とか周りの状況を見れるようになった
- ・ドリブルをしながら相手をかかわしていくこと
- ・レイアップシュート、リバウンド
- ・パス回しが上手になってきた
- ・シュートが上手になった
- ・声の掛け合い、パス、シュートなど上手くできた
- ・試合での動き、パスのタイミングや誰にパスを回すかの判断が上手になった

「将来スポーツをしていきたいですか？」という問いにも約67%の生徒が「していきたい」と答え、生涯スポーツに向けた取り組みになったと考える。

## 2) 課題

### ① 生徒の評価の進め方

今回の授業では、話し合い活動を中心に評価シートを作成し評価を行った。「誰が発言するのか」「どのような流れで話し合っていたのか」を把握するためには、空欄を大きくとった評価シートは大変活用しやすいものであった。

1回目のゲームをした後	
名前	授業での気づきなど
2回目のゲームをした後	
名前	授業での気づきなど

図7 教師用評価シート

しかし、技能面の評価に関しては、教師の観察による評価であったため、あいまいな点が残ってしまった。

今後は、技能面の評価のための評価シートを作成し、評価をもとに一人一人の技能を高めていく必要があると考える。

また、評価に関する時間も考え、「どの項目で評価するかをあらかじめ計画をしておくこと」「評価シートをもとに、即時に評価できるシステムを構築すること」等の評価計画についても今後検討していく必要がある。

### ② 専門性のある講師等の活用

豊かなスポーツライフの実現に向け、次年度は専門性のある講師等の活用を考えていく（出前授業などアプローチしていく）。具体的には、地域の資源である熊本ヴォルターズや熊本大学のバスケットボール部の学生に参加を依頼し、本物のプレイを見る経験をする。また、ゲームの観戦に出向き、会場までの交通手段や会場でのマナーを知ることでも豊かなスポーツライフを支えるうえで有効だと考える。

## 4. まとめ

今回の授業では、生涯を通したスポーツライフの実現に向けた取り組みを、本校の卒業生を対象としたフォローアップミーティングの結果とも関連させながら、卒業後の「充実した豊かな生活」を送るためにというテーマで取り組んだ。

まず、将来の余暇（豊かなスポーツライフ）の充

実を図るために、運動に関して、「楽しい」、「観てみたい」「実際にやってみたい」という気持ちを育んでいきたいと考えた。

そのために、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から「する」「見る」「支える」「知る」ことを授業ベースで考えた。

授業では、一人一人が「友達や教師と一緒にする」「自分たちの動きを客観的にみる」「互いに高めあえるよう支え合う」「運動課題や解決方法に対して知る」といった目標で、生徒が「楽しい」、「やってみたい」と感じられる授業を計画した。

このことによって、「体育が好き」「バスケットボールが楽しい」という生徒が増え、「運動が苦手」という生徒を減らすことができたことは一定の成果であると考える。

しかし、評価方法や地域資源の活用などの課題も残った。今後は、その課題を解決しながら、生徒一人一人の運動技能を高めるとともに、「生涯スポーツ」に向けた意欲の育成も視野に入れながら授業を改善していきたい。

## 引用文献

文部科学省（2010） 特別支援学校高等部学習指導要領.

文部科学省（2010） 特別支援学校高等部学習指導要領解説総則等編.

丹野哲也（2016） 知的障害児・者のスポーツ.  
丹野哲也（監修）全国特別支援学校知的障害教育校長会（編） 東洋館出版社.